生涯の宝物――友との語らい

特徴的な授業以外にも、社会奉仕活動として海岸・崖救助訓練をしたり、プロジェクトウィークでスペインにホームステイをしたりとACならではのさまざまな体験があったが、何より楽しかったのは友人たちと語り合う時間である。寮のリビングで、校舎の一室で、海岸で、毎日雑談を、ときに議論を飽くことなくしていた。心底憧れた時間を本当に過ごすことができたことは、生涯の宝物である。

寮の同級生たちと（右下が筆者）

UWCの経験と対照的だったドイツ留学

AC卒業後、私は京都の大学に進学したが、AC時代に仲の良かったドイツ人の友人たちを想い、「彼らの国に住んでみたい」との安易な理由でベルリンに一年間留学することにした。しかしこのときはACの留学時と何もかもが違った。一言でいえば、「何をしたらいいのかよく分からなくて苦しい」状態が続いたのである。UWCのように「みんな違って当たり前、みんな違ってみんないい」ではなく、ある文化、言語、習慣を有する社会集団に一人で入ることの大変さがあった。UWCで当然のように享受していた、目的あるカリキュラムや他人とかかわりやすい寮生活など、整った学習環境の重要さとありがたさを知った。ドイツ留学時に目標がはっきりしていなかった自分が悪いといえばそれまでだが、「何かうまくいかない」ことが人生にはあるということを、貴重な大学生活の一年を使って知った。しかしそれは振り返れば、うまくいかないときにもがいてみること、弱っている人の気持ちを理解することなど、自分にとってUWCとまた違った修行の場となったように思う。

次の世代を応援

現在私は国際協力機構（JICA）の債権管理部に勤務し、途上国の経済開発プロジェクトに対する日本のODA資金の貸付業務に従事している。普段は東京のオフィスで書類に向き合っているが、担当国への出張の際など、ACの誰それはこういう土地から来ていたのかと、あらためてUWC生たちの背景の多様性を考える。ある国に関する仕事をすることになったとき、かつての同級生を思い、その国に親近感を抱く。自分の気持ちを外国に近く寄せてくれるACの経験を糧に、誰かのためになる仕事ができるよう、力をつけていきたい。

先日「進路講演」との題目で、茨城県つくば市の母校で中学三年生に向けて、UWCの体験と現在の仕事について話をした。「今の若者は内向き」とメディアが報じるが、聴講者のアンケートを見ると「留学してみたいと思った」「外国との仕事は楽しそうだ」など、前向きな感想が多かった。必要な情報と、周囲のちょっとした応援があれば、日本の外への一歩を踏み出すことができる中学生、高校生はたくさんいると思う。その一歩の先が楽しい道でも辛い道でも、とても大きなものを彼らの人生にもたらしてくれるはずだ。UWCへの留学という、素晴らしく貴重な経験をさせていただいた自分の使命の一つとして、今後もUWC卒業生会の活動などを通して、次の世代を応援し続けていかなければと考えている。

ユナイテッド・ワールド・カレッジ（UWC）の詳しい情報については、
http://www.keidanren.or.jp/japanese/profile/UWC/index.html参照

次世代の応援につなげたい、UWCの経験

国際協力機構債権管理部
久保彩子（くぼ あやこ）

茗渓学園より、二〇〇一―〇三年UWCアトランティックカレッジ（英国校）に留学。〇九年京都大学経済学部卒業後、独立行政法人国際協力機構（JICA）に勤務。現在はわが国のODA借款債権管理の業務に携わっている。

英国ウェールズの南ブリストル海峡に臨む地に、十二世紀の古城St. Donats Castleを校舎の中心として建てられたAtlantic College（AC）。そこでは世界八〇カ国以上から集まった約三五〇人の留学生が寮生活を送る。ディスカッション主体の授業や自由テーマの卒業論文、社会奉仕活動等が組み込まれた国際バカロレア（IB）のカリキュラム、プロジェクトウィーク(注)の活動、そして各国の学生間の心身でぶつかるような日々の交流等々、ユナイテッド・ワールド・カレッジ（UWC）の何もかもに憧れ奨学生派遣試験を受け、合格の電話を受けたその瞬間のことは忘れられない。世界各国の人たちと友達になりたいとの思いを持ち、期待に胸ふくらませて一七歳の私は飛び立った。

「自分の頭で考える」を実践できたカリキュラム

ACの授業は確かにディスカッションが多くはあったが、理論を体系的に学ぶ、その道筋が確実に用意されていた。ありがたいのはそこで学んだ理論をもって、何をどう考察することができるのか、「自分の頭で考える」道にも手を取って招き入れてくれたことである。程度の差はあれ、どの科目も授業内容や課題による訓練で、問題を自分で発見し、解決策を考えられる頭が育てられていくものであった。例えば経済学のクラスでは、教室で学んだ経済理論を用いて、新聞や雑誌の記事で取り上げられている事象を分析・説明するという課題が定期的に課された。これは教室で学んだことを用いて実社会で起こっていることを考察する大変良い訓練であった。

他方、生物学の授業は、校舎の裏山でひたすら虫やら葉っぱやら石ころやらを観察したり、学校の敷地内で産まれたもののすぐに死んでしまった子羊を解剖してみたり、どうにもこうにもIBのカリキュラムどおり進まない。結局生徒たちは卒業試験前になって教師の計画性のなさに悪態をつきながら必死に教科書を読み進めるのであるが、先生の身の回りへの興味や愛着から学んだことは、卒業後も楽しく思い返される。

●ユナイテッド・ワールド・カレッジ（UWC）日本協会は、世界各国から派遣されてくる生徒たちとの教育体験の共有により、国際感覚豊かな人材を養成するという理念を掲げるUWCの日本委員会として、毎年一〇名前後の高校二年生を世界各地にあるUWC傘下の高校に派遣し、すでに四三四名の卒業生を輩出している。

(注)プロジェクトウィーク：学生たちが1～2週間のプロジェクトを自主的に計画し、実行に移すという活動